

古活字版『史記』覚書

— 学習院大学図書館蔵本を中心に —

小 秋 元 段

はじめに

学習院大学図書館には近世極初期に刊行された古活字版『史記』五十冊が所蔵される。本書は原装表紙に原題簽を押す堂々たる体裁を保つが、これまでその存在は殆ど知られなかった。一九三〇年発行の『学習院図書館和漢図書目録』に「四二二／五八」の函架番号で著録されているものの、不敏にして筆者自身、「嵯峨本『史記』の書誌的考察」(『法政大学文学部紀要』第四九号、二〇〇四年)をまとめた段階では見落としていた。その後、学習院大学外国語教育研究センター教授大澤顯浩氏・慶応義塾大学附属研究所斯道文庫助教授高橋智氏より本書の存在についてご教示を得るとともに、大澤氏を代表者とする共同研究「学習院大学所蔵古活字版漢籍の調査」(学習院大学外国語教育研究セ

ンター)の一員に加えていただき、数度にわたる熟覧の機会に恵まれた。その調査結果は二〇〇六年十月刊行の『太平記と古活字版の研究』(新典社)において「補記」として一部記し、さらに同年十二月二日に行われた学習院大学外国語教育研究センター主催の学術シンポジウム「近世初頭の出版と学問—学習院大学蔵古活字版『史記』をめぐる—」において報告した。本稿は当日の発表内容をもとにした上で、これまで目にしてきた古活字版『史記』の略書誌を掲出するものである。

一 学習院大学図書館蔵本の特徴

川瀬一馬氏『増補古活字版之研究』(ABAJ、一九六七年)によれば、古活字版の『史記』は三種に分類される。即ち、八行有界の第一種本、八行無界の第二種本、九行無界の第三種本で、今日にいたっても修正の余地はない。このうち、第一種本が最も古い版種と考えてよく、その刊年は『言経卿記』慶長八年(一六〇三)十一月二十日条に古活字版と思しき『史記』の名が見えることから、この少し前にあたるのであろう。また、『羅山林先生集』所収「羅山先生年譜」には、吉

田玄之（角倉素庵）が嵯峨で『史記』を刊行したことが記されている。これを裏づける資料として『言経卿記』前掲条があり、そこには山科言経の子言緒が『史記』を嵯峨より取り寄せた旨が記されている。従来より古活字第一種本の『史記』は「伝嵯峨本」と称されてきた。ここで「嵯峨本」の呼称を、嵯峨で素庵によって刊行された本として聊か広義にとらえることが許されるならば、あえて「伝」を取り、「嵯峨本『史記』」と呼ぶのがよいのではなからうか（以上、詳細は前掲『太平記と古活字版の時代』に記したので、参照されたい）。さて、学習院本はこのうちの第一種本に属する。第一種本は目下、三十五点の存在が確認されており、これは同一版種の古活字本が残存する数としては多いものである。その中で学習院本は原装表紙に原題簽を備え、かつ刊行直後の識語を有する点で、書誌学上貴重な伝本といえる。後述するとおり、嵯峨の刻書においては装訂に独特の風を凝らす傾向があり、その追究は嵯峨本研究の主要なテーマといっても過言ではない。では、まず学習院本の書誌を掲げよう。

学習院大学図書館蔵 史記 古活字第一種本 大五十

冊（四二二／五八）

原装茶色表紙（三〇・六×二一・九糎）。原単刃刷枠題簽に「史記 序目録」のごとく刻す。右肩に「一ト五十一」「二（一四十九）」「五十尾」と墨書。前後遊紙各一丁（新旧あり）。第一冊「史記索隱序」二丁、「史記索隱後序」、五丁裏より「史記正義序」通六丁、「補史記序」通九丁、「史記集解序」通十五丁、「史記正義論例諡法解」二十二丁、「史記目錄」二十一丁。本文は第二冊より。内題「三皇本紀 補史記」「五帝本紀第一 史記一」のごとし。四周双辺（二一・九×一七・二糎）有界。八行十七字注小字双行。ただし、本文料紙の節約を図るため、最終丁を九行詰とする巻もある。また、年表にあたる巻は九行を基本とする。版心、粗黒口双花口魚尾、中縫に「史記 序一（例二・録二）（丁附）」「史記 紀一（一十二）（丁附）」「史記 表一（一十）（丁附）」「史記 書一（一八）（丁附）」「史記 家一（一三十）（丁附）」「史記 傳一（一七十）（丁附）」。尾題「三皇本紀 補史記」「五帝本紀第一 史記一」のごとし。朱引・朱句点のほか、朱墨の訓点・振仮名あり。四周余白には注記を詳密に施すが、数次にわたる書き入れと思われる。識語として元和二年のものと、宝曆

十三年のものとがある。まず、元和二年のものは第四十五冊の末に、

元和二月十六日以^{〔朱清〕}□□先生之本点訓之、同十八

日黄／昏終毫

とあり、これとは別筆ながら同時期の識語として以下のものが存在する。

以壽産之加点点也（第二十冊）

世良勘三所膳点点也（第二十一冊）

松岡修井加点了（第二十三冊）

小宮氏長五所膳点点也（第二十四冊）

小宮氏長五之頭書也（第二十九冊）

倩壽産所膳点点也（第三十冊）

倩小宮氏長五加点了（第三十一冊）

南禪浮屠了也所点点也、小宮氏長五之頭書也（第三十三冊）

村上氏市丞所膳点点也（第三十五冊）

倩村上市丞所点点也（第三十六冊）

以村上市丞之手膳点点焉（第三十七冊）

小宮氏長五加細書了（第三十八冊）

以蓑浦伊三之手膳点点（第四十七冊）

以老伊三之手点点之（第四十八冊）

倩老浦氏伊三之手点点之（第五十冊）

また、宝暦の識語は第十五冊の末に、

宝暦十三^未正月、寐屋村濱氏四郎兵衛寄附、元来

／輪空依所望也、是故紋銀一枚爲礼詞送之者也

とあり、同時期のもととして、

史記全部五十冊 所持 輪空圓瑞快龍

紋銀壹枚禮證謝濱氏某（第二冊）

輪空所持（第十六冊）

が認められる。印記「養賢閣／圖書記」「會館／之章」。

右にもとづき、本書の注目点について順に記したい。

まず再三触れてきたように、本書の大きな価値は原裝表紙を持つ点にある。当時は同一の版本であってもそれぞれ表紙の趣を変えることがよく行われており、これまで古活字第一種本の『史記』には以下のような表紙の存在が確認されている。

A 黒空押雷文繫蓮華唐草文様……東洋文庫蔵本

B 茶色空押雷文繫蓮華唐草文様……名古屋市鶴舞

中央図書館河村文庫蔵本（東洋文庫蔵本表紙文

様と左右対称型）

C 丹唐草雷文繫蓮華唐草文様……京都府立総合資料館蔵本（東北大学附属図書館蔵第三種本も同文様〈茶色〉）。河村文庫蔵本表紙文様と覆刻関係にある）

D 淡藤色雲母刷雷文繫牡丹唐草文様……蓬左文庫蔵本（百番本謄本と同表紙）

E 淡茶色空押雷文繫牡丹唐草文様……関西大学図書館蔵本・大阪府立中之島図書館蔵本（蓬左文庫蔵本表紙文様と左右対称型）

F 焦茶色唐草十字印襷文様……内閣文庫蔵本

G 茶色……大谷大学図書館蔵本

H 栗皮……静嘉堂文庫蔵本・重山文庫蔵本・天理図書館蔵本

これらに対して学習院本は無地の茶色表紙であるから、右記のGに該当する。ちなみに表紙文様の種類は多様に見えるようだが、（ ）内に記したごとく、ある本の文様を覆刻して新種を生み出していたのが実際のようだ。江島伊兵衛氏・表章氏『図説光悦謄本解説』（有秀堂、一九七〇年）が実例を以て紹介しているように、これは嵯峨本全体に共通する方法であった。

『史記』の場合、A・B・Cの三種とD・Eの二種が、それぞれ親子関係を有している。

つぎに学習院本の特色は原題簽を持つ点に認められる。これまで古活字版『史記』の原題簽は、東洋文庫蔵本（三／B／c／一）・内閣文庫蔵本（別二六／一）・名古屋市鶴舞中央図書館河村文庫蔵本・京都大学附属図書館蔵本（第二種本）にのみ残存が確認されるだけだから、本書の存在は貴重であるといつてよい。『史記』原題簽は、本紀の冊においては楷書風で刻され、以下、行書でそれぞれくずし方にも変化をつけながら、流麗に刻されている。今回、学習院本の題簽を写真に収め、他本のものと比較したが、いずれも同版であることを確認した。なお、原題簽が特定の本にしか残らないことは、元々古活字版の『史記』では、製本時にすべての本に題簽を押したわけではなかったことを物語ろう（古活字版にはままそうした例が見られる）。

このほか学習院本には刊行直後の識語が残されている点も注目される。右に記したように、本書第四十五冊の末には元和二年の加點識語が存する。加點に際して用いた本が誰のものか、抹消により判別することはできない。これと同時期の識語と見られるものが、全

部で十五冊に残されている。ここでは本書の所持者（第四十五冊の識語を記した人物か）の依頼を受け、加・点・注記を分担した人物の名が記される。実はこれらの識語は各冊の後遊紙裏面に記されているのであるが、冊によっては遊紙を新しいものに改めている。これらの冊にはかかる識語が見られない。原遊紙をとどめる十六冊にすべて識語が残されていることからすると、もとは全冊にこうした識語があったものと推測される。なお、ここに現れた人名について可能な限り探索を試みたが、残念ながら一人の伝も明らかにすることができなかった。第三十三冊には「南禅浮屠了也」なる人名が現れ、南禅寺僧の関与が窺えることから、彼らはいずれも京都に在住していたのではないかと想像される。大方のご教示を冀うところである。

また、本書には第十五冊末ほかに、宝暦十三年の識語が残されている。寐屋村（河内国交野郡）の濱四郎兵衛が輪空なる人物に本書を寄贈し、輪空は礼として紋銀一枚を送った旨が記されている。その後の伝来には不明な点が多いが、「養賢閣／圖書記」は徳川慶喜のあとを受けて徳川宗家を相続した徳川家達のもの。「會館／之章」は華族会館の蔵印で、華族会館を経て学

習院に収蔵されるにいたったことがわかる。なお、徳川家達以後の本書の伝来については、学習院大学図書館主事広瀬淳子氏が綿密に調査され、前述のシンポジウムで報告されている。報告内容の公刊が待たれるところである。

二 古活字版『史記』略書誌

つづいて古活字版『史記』諸本の略書誌を掲げる。古書目録等に掲載された本については、書誌上重要な情報を有する本に限って著録した。なお、本書誌では紙幅の都合から、装訂・識語・蔵書印などの項目を中心に、簡潔を旨として各本の様態を記す。訓点・注記の状態も明記すべきところだが、『史記』においてこれらは施されていることの方が常である。加えて、書き入れ時期等の問題を含めれば、審定の困難なケースも多く、今回の略書誌では一々の言及は見送ることとした。これも偏に筆者の不明のなせる業であり、ご海容を乞うばかりである。

第一種本

版式については前記学習院本の書誌を参照のこと。

東洋文庫蔵 五十冊（三／B／c／一）

原装黒空押雷文繫蓮華唐草文様表紙（二八・九×二〇・九糎）。原題簽を有す。

東洋文庫蔵 五十冊（三／A／h／一三）

後補水色雲母引表紙（二九・八×二二・六糎）。印記「津和野文庫」（津和野藩校）。帙題簽を「史記正義」とする。

東洋文庫蔵 四十九冊（三／A／h／六）

後補香色表紙（二七・〇×一九・六糎）、貼題簽に「史記」と書す。第十一冊、卷十三―十七を合綴（本来、卷十三―十五、卷十六・十七で各一冊）。第十七冊、卷二十八―三十を合綴（本来、卷二十八、卷二十九・三十で各一冊）。第二十四冊には卷四十三・四十四、第二十五冊には卷四十五・四十六をあて（本来は卷四十三と卷四十四―四十六冊で分冊）、第三十一冊には卷六十七・六十八、第三十二冊には卷六十九をあて（本来は卷六十七―六十九で一冊）、第四十冊には卷九十七―百二

第四十一冊には卷百三―百五をあてる（本来は卷九十七―百一と卷百二―百五で分冊）。印記「木正／辞／章」（木村正辞）。糸印一顆。

国立公文書館内閣文庫蔵 五十冊（二七九／一八）

後補淡紅色覆表紙（三〇・五×二二・七糎）、後補素紙表紙。印記「江雲渭樹」（林羅山）。朱引・墨訓点は林鷺峰門人、樋口栄清（島周）により施されたものと思われる（『国史館日録』寛文七年十一月十七日条、『鷺峰先生林学士文集』卷九十八「書授_{下ス}島周二史記ノ後_二」。永青文庫現蔵、林羅山旧蔵『史記評林』に施された訓点を移写したもの（加藤陽介氏・高橋智氏「永青文庫所蔵 林羅山自筆訓読『史記』とその周辺―『史記』訓読研究の新出資料―」『汲古』第四七号、二〇〇五年）。

国立公文書館内閣文庫蔵 四十九冊 卷一・八十三―九十二補配第二種本（別二六／一）

原装焦茶色空押唐草十字印櫛文様表紙（二九・五×二〇・八糎）。原題簽を有す。裏張に慶長古活字中本（安宅）ほか二十八種の謄本、嵯峨本『徒然草』、書状、仏

書等の反古が用いられる。第三十二冊のみ後補香色表紙。左肩打付「史記（朱書） 壹之六」。なお、補配・後補表紙冊を含めて、左下に「一（一四十九）」と冊数を記す。加點識語を残す冊が多く、第三冊の、

慶長十二年丁未秋九月十二日點此一本而已（抹消）
二十七歳、

とあるのが、最も早い日付となる。加點に用いた本としては、第二十二冊に、

慶長拾參年丁未三月十七日以道春本加朱墨之點而
己 洛陽烏（墨減） 澤西叟

とあり、「道春本」の名が見える。最終の第四十九冊には、

寫本曰、所写者彭叔之本也、予以道春之點寫此一本、餘皆如斯、又以秋江之本寫之、兩人之本皆同點故也、慶長第拾六季（美辛）十二月十一日（墨減）、

とある。なお、各識語とも署名部分は抹消・墨減されているが、「持主」得庵書焉（第二十九冊）、「洛陽烏丸玄東廿八歳」（第三十五冊）、「菅氏□東（第四十六冊）」等が僅かに判読でき、菅得庵（玄東）手沢本たるを知る。印記「顔氏家訓曰借／人典籍須加愛／護先有缺壞就／爲補治此亦士／大夫百行一也／□易管玄東

誌」（墨印。菅得庵）「華山圖書」「華山／臧書／之印」。第二冊（卷二）・第三十七冊（卷八十三―八十八）・第三十八冊（卷八十九―九十二）は第二種本補配。原装砥粉色表紙（二八・四×二〇・七糎）。第二冊には、寛延庚午三年四月二十二日以八尾友春印本校之、との識語が見える。

東北大学附属図書館蔵 五十冊（阿／六／一二七）
後補砥粉色表紙（二八・九×二一・〇糎）。印記「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文學博士ノ狩野亨吉氏舊藏書」（墨印）。

国立国会図書館蔵 五十冊（W A七／二五九）
後補丹空押雷文繫桐花唐草文様表紙（三〇・二×二一・三糎）。江戸初期の書入のほか、後期のものも混ず。識語に、

寛政戊午十仲夏既日於 對讀（第二冊）
于時寛政九丁巳臘月八日終點句（第五冊）
が見える。印記「白雲書庫」「野間三竹」「躋壽／館記」（医学館）「向黃邨／珍藏印」（向山黄村）「竹沾／光鴻／之章」（竹添井々）「松方／文庫」（松方正義）。

学習院大学図書館蔵 五十冊（四二二／五八）
前掲。

名古屋市鶴舞中央図書館河村文庫蔵 五十冊

原装茶色空押雷文繫蓮華唐草文様表紙（二九・二×二一・一糶）。貼題簽に「史記目錄 全」のごとく書すが、第三十・四十九・五十冊には原題簽をとどめる。各冊表紙左下に「河村秀根本」の蔵書票貼附。印記「尾張河村復太郎秀根藏」（河村秀根。墨印）。第一冊末尾に楮紙を綴じ、

この書慶長木活の珍籍にて河邨／秀根の手澤本なり、蠹害甚しく／装潢乱れて補修し難きを、大正の／庚申之を整へ圖書館に蔵す、／箕形 鐵と記す。同様に第五十冊後遊紙に、

此書慶長木活之珍籍、河邨秀根手／澤而其子益根所補治、爾後抛函中／不省殆壹百年、蠹害甚而装潢乱離、／于茲大正庚申整殼以藏圖書館、／箕形 鐵

と記す。箕形鐵、本名鐵太郎、市立名古屋図書館職員。同冊後見返には、

安永九年庚子七月朔有五

藤 益根 補治

と墨書あり。なお、本書の空押文様は東洋文庫蔵本（三／B／c／一）のものと左右対称型にて、かつ京都府立総合資料館蔵本と類似する（覆刻関係にあるか）。

大谷大学図書館蔵 五十冊（外丙／一三四）

原装茶色表紙（二九・四×二一・三糶）。左肩打付「史記目錄并序」のごとし。神田喜一郎旧蔵。

天理大学附属天理図書館蔵 五十冊（二二／イ一一）
後補香色表紙（三〇・〇×二一・四糶）。左肩打付「史記 序目錄」のごとし。印記「尾陽／文庫」（尾張藩徳川家）「拂」。

内藤記念くすり博物館付属図書館大同薬室文庫蔵 五十冊（二二〇／五〇八〇七）

後補肌色表紙（二九・六×一九・八糶）。双辺刷梓題簽に「史記索隠」「史記索隠^一（一頁廿九之三十終）」と書す。印記「中野文庫」（中野泰章）。

阪本龍門文庫蔵 五十冊（四九四）

後補薄茶色表紙(二九・二×二一・〇糎)。貼題簽に「史記序目錄」のごとく書す。第一冊見返に藍筆にて「寛政十二年庚申閏四月朔」とあり。印記「木氏/家藏」「節縮/百費日/月積之」(鈴木白藤)。

関西大学図書館蔵 五十冊 卷一補写(C/二二・〇一/S一/一一/五〇)

原装薄茶色空押雷文繫牡丹唐草文様表紙(三〇・一×二一・四糎)。左肩打付「記一 史記一」のごとし。各冊右下に「高善院」と墨書。各冊、印記「石井/秀千/氏章」ほか、「有/齋」の蔵書票(伊藤介夫)を貼附。また、第一・二冊に「多度津/岡田氏/藏書印」「岡田真」第十一冊以降各冊に「明式堂」(墨印)の印が捺される。第四十一冊、表紙上部を薄紅色料紙で補修し、前遊紙裏丁に「谷上法明十二世哲龍自修補焉」と墨書。第五十冊後見返に「當院ヨリ一度余所江参之候、然ルニ不思儀見當リ候テ而/寶曆三ノ秋永之畢 晃暁」と墨書。表紙文様は後記大阪府立中之島図書館蔵本・『図説光悦謡本 解説』所載若林正治氏蔵本と同じ。第二冊(卷一)補写。別種の茶色空押雷文繫牡丹唐草文様表紙(三〇・一×二一・三糎)。題簽、「高善院」の

墨書、他冊に同じ。单边有界。八行十七字。最終丁裏に「法明院/雲樹永」と墨書。江戸前期の写と思われる。

本書は『増補古活字版之研究』に卷十二までの十冊の零本として大阪府立図書館蔵と記されるものだが、同館にかつて蔵されたことはない。ある期間、十冊目までと十一冊以降が別伝来したことは印記からも窺えるが、今日では本来の姿に戻っている。

京都府立総合資料館蔵 五十冊 卷二・三補写(特九一六/八五)

原装丹空押雷文繫蓮華唐草文様表紙(二九・八×二一・四糎)。第一冊左肩に「目錄」と白書。右下「全部五十冊 一」「二(五十尾)」と白書。第一冊、「史記目錄」のあとに「史記索隱序」以下を綴じる。印記「靈/松/院」(墨印)。表紙文様は故宮博物院蔵本・東北大学附属図書館蔵第三種本に同じであることから、原表紙と考えられる。

第三冊(卷二・三)補写。同寸の同表紙。单边有界。八行十七字。江戸初期の筆にて、本書制作時のものと思われる。印記、同。

広島市立中央図書館蔵 五十冊 卷六十一—六十六補写（四八）

後補紙粉色表紙（二九・四×二一・四糎）。双辺刷粋題簽に「史記 序 凡例 目録」のごとく書す。印記「淺野圖／書館藏／書之印」。

第三十二冊（卷六十一—六十六）補写。単辺有界。匡郭、左右連続せず。八行十七字。江戸中期の筆か。

大東急記念文庫蔵 五十冊 序目・卷六十七補配第二種本、卷六十八・六十九補写（三五／一〇／五五六）後補鳥の子色表紙（三〇・一×二一・六糎）。貼題簽に「史記 一」のごとく書す。第三冊、森立之による校異が記され、末尾に校合本奥書が以下のように記されている。

文和三年應鐘廿七日 讀合畢
復三 大監物惟宗守俊

寶治二年五月三日書寫了

同五日移點了

一交了 太史大丞あへ時貞

又校式證本了

建長八年七月卅日受菅家之説了

匠作少書あへ為貞
本云

桑門良曉給此書三字三點改直了
以索隱史記加裏書了 菅家淳高

讀了 菅在時

承久第二歳無射初六日受嚴訓了 菅原龜丸

嘉祿年中以菅説讀了 在御判

仁治三年四月十三日受嚴訓了 菅原在匡

弘安十一年蕤賓八日受家訓了

陰陽大屬あへ有雄

正安二年無射廿五日受庭訓了

主殿權助安倍重章

即ち、『大東急記念文庫貴重書解題』第一卷が記すとおり、この対校本は『経籍訪古志』に著録される旧鈔卷子本求古楼蔵夏本紀一卷にあたる。眉上には明治丁丑十二月二十六日森立之識語あり。印記「森氏」（森立之）「華外」（緑川彰）「江風山／月莊」「稲田／福堂／圖書」（稲田福堂）。

第一冊、第二種本補配。原装紙粉色表紙（二八・五×二一・〇糎）。題簽、他冊と同じ。第十五冊第一丁のみ第二種本補配。第三十二冊のうち、卷六十一—六十六

は同版別本補配が疑われ、卷六十七は第二種本にて補配。二八・六×二一・二糶。

第三十三冊、卷六十八・六十九補写。識語「右商君蘇秦二傳以宋慶元槧本／鈔補寫對校畢／明治丁亥晚冬

緑川容漁彰識（印「越／彰」「華／外」）。

名古屋市蓬左文庫蔵 四十九冊 卷十八補写（一六二

／一）

原装白雲母刷雷文繫牡丹唐草文様表紙（三〇・三×二一・九糶）。左肩打付「史記目錄」のごとし。右に「目

録」「三皇司馬貞補史／五帝堯帝 顓頊 帝嚳 舜」のごとく書す（後

筆）。印記「小野節／家藏書」「宜爾／子孫」（人見竹洞）

「子魚□□／□閣秘書」（人見璣邑）「張府／内庫／圖書」（尾張徳川家）。

第十二冊、卷十六・十七につづき、卷十八を補写して合綴。双辺有界。九行十八字。年表部分も補写。江戸中期の写か。外題「史記 十六 十七 十八」のうち、「十八」のみ別筆。「秦楚際目表／漢興來諸侯年表／高祖功臣年表」は同筆。蔵書印は卷十七末尾に二顆。

佐賀県立図書館鍋島文庫蔵 二十四冊 卷二十九・三

十補写（鍋／九九三・二／九九）

後補焦茶色表紙（二八・〇×一九・八糶）。卷二十九・三十のみ補写。印記「鍋島／家藏」「弘道／館藏／書印」。

天理大学附属天理図書館蔵 四十冊 欠卷一一一二（二二二／イ七一）

後補薄茶色空押雷文繫牡丹唐草文様表紙（三〇・三×二一・六糶）。貼題簽「史記六表」のごとく書す。印記「三井家／聴永閣」（三井高堅）。

大阪府立中之島図書館蔵 八冊 存卷四十・四十三・六十一―六十六・八十九―九十二・百二十一―百二十一・百二十五―百二十八（甲和／一二二六）

原装薄茶色空押雷文繫牡丹唐草文様表紙（二九・六×二〇・九糶）。表紙文様、関西大学図書館蔵本・『図説光悦謡本 解説』所載若林正治氏蔵本と同じ。

成實堂文庫蔵 四冊 存卷六・三十一・三十二・四十七・四十八・五十四―五十七

新補黄土色覆表紙（三〇・三×二一・五糶）。左肩打付

「慶長活字史記 壹」のごとく書す。第一冊のみ右下に「慶長十一年云々跋語在焉」とあり。いずれも徳富蘇峰筆。原装栗皮表紙。第一冊のみ「慶長十一年跋語あり」零本共四／珍」と朱書。なお、現状では卷三十一・三十二の一冊が第一冊にあてられている。第一冊末に、

慶長十一丁未秋八月以東福寺善惠軒之本新加朱墨倭点者也、

の識語あり。印記「徳富／所有」「蘇／峯」「蘇峰／清賞」「天下之公／寶須愛護」「蘇峰學人／徳富氏愛／藏圖書記」（徳富蘇峰）。

お茶の水図書館成篋堂文庫蔵 三冊 存卷八十三―九十二

新補砥粉色表紙（二九・五×二〇・七糎）。各冊、左に徳富蘇峰の筆で「卷末有慶長十四年跋語」と墨書される。識語、

慶長十四易草木己酉三月二十又四日點之終 〔置〕原

（第一冊）

慶長十四秋菊月上旬以朱墨點之 〔置〕九箇

（第二冊）

慶長十四己酉十一日朔点之畢 〔置〕（第三冊）

印記「顔氏家訓曰借／人典籍須加愛／護先有缺壞就／爲補治此亦士／大夫百行一也／□易管玄東誌」（墨印。菅得庵）「華山／臧書／印」「蘇峰學人／徳富氏愛／藏圖書記」「善本」（徳富蘇峰）。菅得庵旧蔵にて前記内閣文庫蔵本（別二六／一）の傍卷。

静嘉堂文庫蔵 三冊 存卷十八―二十二・三十三―三十六（一〇五／二四）

原装栗皮表紙（三〇・一×二一・五糎）。各冊、右上に、八行十七字有罫 第一種／年表のみ九行なり。

（第一冊）

九行十七字有罫 第二種／年表のみ九行（第二冊）
九行十八字 若シクハ十七字有罫 第三種／年表第八卷以下十七字 年表のみ九行（第三冊）

と川瀬一馬筆の小紙片を貼附。見返、改装。第一冊後補遊紙に、川瀬一馬筆による左記の貼紙あり。

古活字版史記ノ研究

角倉素庵カ史記ヲ出版シタルヤ否ヤ、其事実ヲ知ラント欲シ、極力調査シタレ共確証ヲ得ス、旧書ニ散見スル記事ハ反テ其存在ヲ疑ハシムルノ資料

トナレリ、鶯峯林學士文集ニ載セタル嵯峨本ノ史記ニ關スル記事ハ、寛文六年ニ起草セシモノナリトノコトナルモ、「訓点アル史記」ヲ嵯峨本ノ史記ナリト稱ス、然ルニ世人カ一般ニ嵯峨本ノ史記ト唱フルモノハ活字版ニシテ、八行十七字本ノナリ、予ガ存在ヲ疑フモ是等ノ事実ニ依ルナリ、此頃古活字版史記ノ零本ヲ蒐メ之ヲ研究セシニ、版式ノ異ナルモノ五種アリ、即チ(一)八行十七字本、(二)九行十七字本、(三)九行十七字本若クハ十八字本、(四)九行十七字本、(五)八行十七字無罫本是ナリ、而シテ全部完全ニ現存スル物ハ第四ノ九行十七字有罫本ナリ、又最モ稀ナルハ第五ノ八行十七字無罫本ナリトス、而シテ第一第二第三ノ三種ハ其表紙皆同一ニシテ、其裏張ノ反古紙ニ慶長活字ノ節用集ヲ用ヒタルモノナリ、此三種ハ周辺ノ輪郭同大ニシテ字体摺亦同シ、恐クハ同一本ナルベシ、之ヲ嵯峨本ノ史記ナリト唱フル者アリ。

ここで川瀬は古活字版『史記』を五種に分けているが、年表が九行であるため、(二)(三)は(一)とともに第一種本に分類されることになる。そのことは本書第二・三冊の表紙貼附の小紙片に記された種別を訂正していること

や、右の記述に「此三種ハ周辺ノ輪郭同大ニシテ字体摺亦同シ、恐クハ同一本ナルベシ」とあることから確認できる。また、「全部完全ニ現存スル物ハ第四ノ九行十七字有罫本ナリ」とあるのは、無罫本(第三種本)の誤りか。さらに「第一第二第三ノ三種ハ其表紙皆同一ニシテ、其裏張ノ反古紙ニ慶長活字ノ節用集ヲ用ヒタルモノナリ」とあるのは、本書表紙裏張をさしての記述と思われるが、『増補古活字版之研究』によれば、本書に用いられたのは「高館」等の古活字版舞の本の反古であるから(上巻四〇一頁)、不審である。現在、裏張の反古は存否不明。印記「阿部／臧書」。後記重山文庫蔵本(存卷十三―十五)・天理図書館蔵本の傍卷。

架蔵 三冊 存卷七・七十四―七十八(補写)・九十三―九十六

新補茶色表紙(三〇・四糶×二一・五糶)。第二冊は双辺(二三・〇×一七・一糶)有界九行、版心粗黒口双花口魚尾の整版印刷料紙に本文を書写。江戸中期の写か。第三冊、卷九十三第二・六・九丁、卷九十四第三丁補写。双辺(二三・〇×一七・一糶)有界九行、版心粗黒口双花口魚尾の古活字印刷料紙を使用。江戸初期の

写。印記「黒川氏／圖書記」（黒川春村）。

新村出記念財団重山文庫蔵 一冊 存卷十三—十五
（二二一・〇一）

原装栗皮表紙（三〇・二×二一・七糎）。表紙に、

史記卷十三至卷十五 零本 一冊有界双極 九行十七字

裏標紙に貼付せる平假名活字本

の發紙 表面（「嵯峨本」と補入）＝平家又盛

衰記？珍重すべし

裏面＝御伽草子の類？ 昭和四、三、廿六

（サイン）

と新村出により記された懸紙を附す。また、表紙右上に「九行十八字有罫／但第七丁以下十七字（恐クハ第三種「二種ト同版」とセピア色万年筆にて記した小紙片を貼る（「第三種」の傍記のみ赤字）。川瀬一馬筆か。現状では後表紙に反古を綴じ込む。古活字版舞の本「八島」「伏見常盤」。印記「阿部／臧書」。静嘉堂文庫蔵本・天理図書館蔵本（〇一一／イ一一／五七）の僚卷。

新村出記念財団重山文庫蔵 一冊 存卷百十・百十一
（二二一・〇一）

原装栗皮表紙（三〇・一×二一・七糎）。懸紙に、

史記古活字本 衛叔列傳 衛將軍驍列傳

零本 一冊

八行十七字有界双極

と記す。印記「洒竹文庫」（大野洒竹）「新邨／氏圖書記」（新村出）。

天理大学附属天理図書館蔵 一冊 存卷十六・十七（〇

一一／イ一一／五七）

原装栗皮表紙（三〇・二×二一・六糎）。後表紙見返に「嵯峨本／平家物語／（植字版）／表紙裏打紙」と記す紙片を貼附。前記静嘉堂文庫蔵本・重山文庫蔵本（存卷十三—十五）の僚卷にて、重山文庫本同様、古活字版舞の本「八島」「伏見常盤」の反古を裏張とする。印記「阿部／臧書」「昭和廿三年十月三十日／贈寄市橋定雄氏」（日時・氏名は墨書）。

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 一冊（〇九一／ト二六〇／一）

新補茶色表紙（三〇・四糎×二一・五糎）。印記「黒川氏／圖書記」（黒川春村）。前記架蔵本の僚卷。

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷百十二―百十六
(A〇〇／五八七八)

焦茶色表紙(三〇・二×二二・七糎)。総裏打施される。

早稲田大学図書館蔵 一冊 存卷百十七(リ八／一七

〇九)

原装栗皮表紙(三〇・四×二二・五糎)。貼題簽に「

」^{五十七}と書す。

(以下未見)

台湾故宮博物院蔵 五十冊

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵のマイクロフィルムによれば、表紙は京都府立総合資料館蔵本と同じ雷文繫蓮華唐草文様を有する。

栗田文庫蔵 四十九冊

『栗田文庫善本書目』に「原装丹表紙、題箋付。卷三・四の一冊缺」とある。ただし、「卷三・四」とあるのは、卷二・三の誤か。

尊経閣文庫蔵 四十八冊

『弘文荘古活字版目録』所載本 五十冊

「表紙は赤茶色地に大きく唐草の模様を押し出した原装」とあって、京都府立総合資料館蔵本と同様、丹空押雷文繫蓮華唐草文様表紙であったと思われる。

『図説光悦謡本 解説』所載若林正治氏蔵本(二六一図) 関西大学図書館蔵本と同様、雷文繫牡丹唐草文様表紙を有する。

第二種本

第一種本よりあとに刊行されたものと思われる。第一種本には複数の切り貼り訂正部分が共通して見られるが、それが正されていることから、先後関係が窺える。第一冊「史記索隱序」二丁、「史記索隱後序」、五丁裏より「史記正義序」通六丁、「補史記序」通九丁、「史記集解序」通十五丁、「史記正義論例諡法解」二十二丁、「史記目錄」二十一丁。本文は第二冊より。内題「三皇本紀 補史記小同馬氏 漢書注」五帝本紀第一 史記一「の」とし。

四周双辺（二一・七×一六・八糎）無界。八行十七字注小字双行。ただし、本文料紙の節約を図るため、最終丁を九行詰とする巻もある。また、年表にあたる巻は九行有界を基本とする。版心、粗黒口双花口魚尾、中縫に「史記 序（例二・録二）（丁附）」「史記 紀一（十二）（丁附）」「史記 表一（一十）（丁附）」「史記 書一（一八）（丁附）」「史記 家一（一三十）（丁附）」「史記 傳一（一七十）（丁附）」。尾題「三皇本紀 補史記」「五帝本紀第一 史記一」のごとし。

京都大学附属図書館蔵 五十冊（谷村文庫／五一四二／シ／一貴）

原装丹空押己繫牡丹唐草文様表紙（三三・三×二一・四糎）。薄鼠色原題簽を有す。印記「秋邨遺愛」（谷村一太郎）。

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 五十冊（〇九二／ト八五）

後補砥粉色表紙（三三・〇×二一・七糎）。左肩打付「史記序例」のごとし。以下の通り識語が存す。

天和癸亥九月五日／孚軒研朱（第三冊）
（三年）

文化癸亥八月十五日於成齋与小島氏神谷氏清水氏／津山氏會讀了、時殘暑如蒸適驟雨來始／知秋涼

■ 題帖切々、（第二十七冊）

印記「讀耕齋／之家藏」（林讀耕齋）「松本氏／藏書印」
 「勝鹿文庫」「幸彦／之印」（松本幸彦）「森氏藏書」（森立之）「藤氏／所藏」「水天／書堂／収藏」「三井家鑒藏」「双麓鑒藏」「高安後／人士□／壬戌以／後所集」（三井高堅）「岡田真」「多度津／岡田氏／藏書印」（岡田真）。

国立公文書館内閣文庫蔵 五十冊（別二五／一）
 後補縹色表紙（二八・五×二〇・一糎）。左肩「史記 序目錄」のごとく朱書。印記「寂／潭」「尚徳館／藏書印」。「桑原氏／藏書印」とあつて墨減される。

大東急記念文庫蔵 五十冊（二二／四〇／五七）

原装砥粉色表紙（二八・二×二〇・七糎）。左肩打付「史記」。表紙、成簀堂文庫蔵本（十五冊本）・慶応義塾大学図書館蔵本（二七九／五四／一）・内閣文庫蔵第一種本（別二六／一）補配本・大東急記念文庫蔵第一種本（三五／一〇／五五六）補配本と同じ。

東京大学東洋文化研究所蔵 五十一冊 卷六・七補写
(貴重／甲三〇)

原装栗皮表紙(二八・九×二〇・八糎)。中央に「史記
序目録」のごとく朱書。印記「雙鑑／樓藏／書記」。

お茶の水図書館成簀堂文庫蔵 二十九冊

原装栗皮表紙(二九・〇×二〇・六糎)。徳富蘇峰の手
により「活字版 共二十九冊／蘇峯學人／史記 首」
のごとく朱書す。各冊、見返を補修し、原見返紙を遊
紙のごとくす。

第一冊の首・尾に蘇峰筆にて、本書を大正二年に東金
東漸寺で発見、入手し、同三年に補修を終えた旨を記
す。

慶応義塾大学図書館蔵 三十冊 卷二十五・二十六・
五十八―六十補配第一種本(四一／一／三〇)

後補丹表紙(二八・一×二〇・〇糎)。貼題簽に「話字
版史記 序目 一」のごとく書す。印記「義／印」(陰
刻)ほか。

お茶の水図書館成簀堂文庫蔵 十五冊 存卷二―四・

七―十二・十八―二十二・二十七―三十・三十七―四
十二・五十四―六十・百二―百三十

原装砥粉色表紙(二九・四×二一・〇糎)。印記「蘇峰
學人／徳富氏愛／藏書記」「善本」「成簀堂／圖書記」。

関西大学図書館内藤文庫蔵 七冊 存卷二十一(一〇
〇一)

原装焦茶色表紙(二九・四×二〇・八糎)。貼題簽に「史
記 二」のごとく書す。

国立公文書館内閣文庫蔵 二冊 存卷一―三・六十一
―六十九(二七九／一九)
薄茶色空押文様表紙(三一・五×二一・六糎)。

国立公文書館内閣文庫蔵 一冊 存卷九十三―九十六
(二七九／八二)

後補海老茶色表紙(二八・六×二一・一糎)。貼題簽に
「史記 韓王信、廬綰列傳」と書す。

静嘉堂文庫蔵 二冊 存卷十六・十七・七十四―七十
八(一〇五／二四)

卷十六・十七の一冊。新補薄紅色表紙（二八・六×二一・一糎）。右上に、

岩崎久原本ト同一 八行無界本の中なり。

九行十七字有異

第四種 第貳種

年表の部分のみ九行十七字

と記す紙片を貼附。川瀬一馬筆。

卷七十四―七十八の一冊。新補薄紅色覆表紙（二八・

六×二一・〇糎）。右上に、

八行十七字無異

一本ノミ

第五種

本書の年表の部分のみ有界九行本

と記せる紙片を貼附。原裝砥粉色表紙を存す。印記

「阿部／□家」。兩冊、もとは別伝来である。

慶応義塾大学図書館蔵 一冊 存卷九十七―百一（一

七九／五四／一）

原裝砥粉色表紙（二八・五×二一・〇糎）。印記「阿部

／□家」。

（以下未見）

天理大学附属天理図書館蔵 五十冊 卷二十五・二十

六・三十八・四十三・六十一・六十二補写（二三二／イ
一七）

第三種本

第一冊「史記索隱序」二丁、「史記索隱後序」通四丁、「史記正義序」通六丁、「補史記序」通九丁、「史記集解序」通十四丁、「史記目錄」十九丁、「史記正義論例證法解」二十丁。本文は第二冊より。内題「三皇本紀補史記（小向馬氏）」「五帝本紀第一 史記一」のごとし。四周双辺（二二・〇×一六・七糎）無界。九行十七字注小字双行。ただし、年表にあたる巻は九行有界。版心、粗黒口双花口魚尾、中縫に「史記 序一（録一・例二）（丁附）」「史記 紀一（一十）（丁附）」「史記 記十一（十二）（丁附）」「史記 表一（一十）（丁附）」「史記 書一（一八）（丁附）」「史記 家一（一三十）（丁附）」「史記 傳一（一七十）（丁附）」。尾題「三皇本紀補史記」「五帝本紀第一 終 史記一」「殷本紀第三 史記三」「周本紀第四 終」「律書第三 史記二十五 終」のあとく一定せず。

東洋文庫蔵 五十冊(三/A/h/五)

原装丹空押雷文繫蓮華唐草文様表紙(二八・九×二一・三糎)。印記「生駒氏／藏書」。第四冊末に「明治二十年十月二十五日講終／壁園先生講」と墨書あり。

神宮文庫蔵 五十冊(一一八一)

原装丹表紙(三二・四×二一・八糎)。右上「□□／五帝 共五十」(第二冊)のごとく墨書。印記「林崎／文庫」「林崎文庫」「保壽庵」(陰刻)「艸／□」「杏／山」(鼎型)。

東京大学総合図書館蔵 五十冊 卷八十三―八十五補

写史記評林(A〇〇／五八九八)

原装丹空押雷文繫牡丹唐草文様表紙(二九・一×二一・〇糎)。左肩打付「史記 目録」のごとし。第三十二冊最終丁に、

慶長十三^町夷則自恣日、以所摸幼^{マヤ}雲師之本之善恵翁之^本而加朱之句／讀、墨之和点、又抄書于其上、豈不忻然乎、

と識語あり。なお、表紙は後記成實堂文庫蔵本と同じ。第三十七冊補写。同寸の丹表紙。外題、他冊に準ず。

内題「史記評林卷之八十三(一八十五)」とし、『史記評林』からの転写である。各冊印記「越中上新川／久金新村／青井三郎」。

お茶の水図書館成實堂文庫蔵 五十冊

原装丹空押雷文繫牡丹唐草文様表紙(二九・二×二一・一糎)。貼題簽に「史記^{抄序}」のごとく書す。印記「蘇峰學人／徳富氏愛／藏圖書記」「天下之公／寶須愛護」「蘇峰清賞」「徳富／所有」「天下之公寶須珍惜愛護蘇峰屬」[Tokutomi] (徳富蘇峰)「青山／艸堂」(陰刻)。前記東京大学総合図書館蔵本と同表紙。

金沢市立玉川図書館近世史料館蔵 四十九冊 欠卷一―三、卷十三―十五補配和刻本史記評林(漢・補／六)後補栗皮表紙(二八・四×二〇・六糎)。貼題簽に「史記 ^{本紀四} 二」のごとく書す。識語、

寛永二十一甲申菊月望日點此一冊畢(目録末)寛永甲申九月廿六之晚以朱墨点之而已(卷八末)各冊、表紙見返に「鶯養軒藏書」と墨書。後表紙見返には「上山鈴嶂」と墨書。印記「竹□／山人／圖書」。卷十三―十五は和刻本『史記評林』を補配。双辺(二

四・〇×一三・六）無界。十行十九字、注小字双行、附訓。版心、白口上黒魚尾、上象尾に「史記卷十三」、中縫に「^マ二代世表（丁附）」のごとし。後表紙見返に「天保十一年五月廿七日」と墨書。なお、現状では各冊の順が大幅に乱れている。

東北大学附属図書館蔵 十三冊 欠卷六十一―六十六（狩／三／五九五四）

新補茶色覆表紙（二九・五×二一・〇糎）。原装茶色空押雷文繫蓮華唐草文様表紙（京都府立総合資料館蔵本と同一文様）。左肩打付「史記 序目 一之四」。印記

「□掌館／圖書」「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ／以テ購入セル文學博士ノ狩野亨吉氏舊藏書」（墨印）。各冊、表紙裏張に薄茶色の紙を用いるが、第十冊後表紙・第十三冊後表紙には本の表紙が補強材として使用されている。第十三冊後表紙のものは、栗皮表紙（二〇・八×一四・六糎）にて、原題簽に「源氏供養」と刻す。第十冊後表紙に用いられたものは、その後表紙。

国立国会図書館蔵 四十三冊 欠卷一―五・七・七十―七十三・百十二―百十六（WA七／九八）

後補香色表紙（二八・六×二〇・九糎）。双辺刷梓題簽に「史記」と書す。第一冊、「史記目錄」を「史記正義論例諡法解」のあとに綴じる。印記「菅原／爲徳（陰刻。五条為徳）」「寅□坊」「榊原家蔵」「故榊原芳埜納本」（榊原芳埜）。

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷五（A〇〇／五八七九）

後補縹色表紙（二八・八×二一・〇糎）。印記「寅□坊」「子得」「榊原家蔵」。前記国立国会図書館蔵本の僚卷。

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷八（G三〇／四五七）

後補肌色布目表紙（二九・一×二一・〇糎）。貼題簽に「漢高祖本紀零本全」と書す。印記「乾坤／□珠」（陰刻）「沙羅／□園」「陽春／廬記」（小中村清矩）「南葵／文庫」。

（以下未見）

台北国立中央図書館蔵 五十冊

台北国立中央図書館蔵 五十冊

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫所蔵のマイクロフィルムによれば、下記の識語が確認できる。

慶長十一丁未秋八月以東福寺善惠軒之本新加朱墨

倭点者也、(卷三十二末)

慶長十三^町夷則自恣日、以下所^レ摸^ニ幻雲師之本^ヲ之

善惠翁之本^上而加朱之句讀、墨之和点、又抄書于

其上、豈不忻然乎、(卷六十六末)

(附記)

本論考は学習院大学外国語教育研究センター二〇〇六年度研究プロジェクト「学習院大学所蔵古活字版漢籍の調査」による研究成果の一部である。

三皇本紀

補史記

小司馬氏撰并注

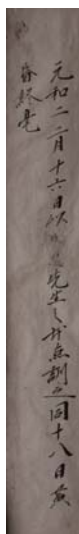
小司馬氏云太史公作史記古今君臣宜應上自開闢下迄當代以爲一家之首尾今闕三皇而以五帝爲首者正以大戴禮有五帝德篇又帝世皆叙自黃帝已下故因以五帝本紀爲首其實三皇已還載籍罕備然君臣之始教化之先既論古史不合全闕近代皇甫謐作帝王世紀徐整作三五歷皆論三皇已來事斯亦近古之一證今並採而集之作三皇本紀雖復淺近聊補闕云

太皞庖犧氏風姓代燧人氏繼天而王母曰

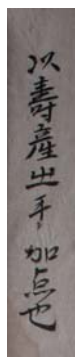
題簽



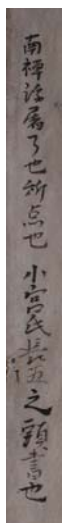
第四十五冊識語



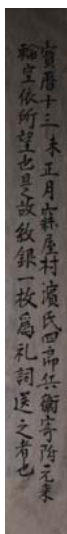
第二十冊識語



第三十三冊識語



第十五冊識語



略述古活字版《史记》 ——以学习院大学图书馆所藏版本为主

小秋元 段

学习院大学图书馆收藏有江户时代初期刊行的古活字版《史记》50册。古活字版《史记》的版本有三种，这个版本是其中的第一种，是庆长8年(1603)以前由角仓素庵（角倉素庵）在京都嵯峨刊行的。角仓素庵在嵯峨刊行的书籍一般称为〈嵯峨本〉，装帧美丽是其特色。古活字第一种版本的《史记》，经确认有八种原装封面的现存，也有一些书册保留着以流丽字体印刷的原来的书签。

学习院大学所藏本的特征，首先是保持着原装书皮与原来的书签的面貌。再者，还遗留有元和4年(1618)写的加点与识语。后者尤其值得关注。本论文归纳了上述学习院大学藏本的书志特征，并且列举了迄今为止笔者调查到的约50件古活字版《史记》的书志。